

生産者・産地と交流し、 食の大切さを知り、伝える活動



生活協同組合コープさっぽろ
組織本部
放課後児童クラブ推進室

吉田千恵

みなさん、こんにちは。吉田千恵です。
今年六月まで、コープさっぽろで組合員活動をしていました。現在はコープさっぽろ放課後児童クラブ推進室の職員です。
どうぞ宜しくお願いいたします。

猛暑の夏から収穫の秋へ

北海道とは思えない暑さが続く夏が過ぎ、田畑の実りが美味しい季節になりました。それにしても暑い夏でしたね。わが家には猫が一匹おり、あまりの暑さにエアコンをつけて仕事に行った日もありました。息子達の部屋にはそれぞれ扇風機を設置、電気代は通常の倍近くになりました。

北海道の平均気温は平年より二・二度高く、昨年に次ぐ、史上二番目の暑さだったようです。気温が二・二度高いということを私たち人間の体温に置き換えて考えてみると、平熱三六度の人が三八度

二分になる。これは病院へ行くレベルです。

このような異常気象は、台風や大雨の頻度と強度にも影響し、野菜の収穫量が減少、価格の高騰にもつながっています。原油価格の変動や円安、国際情勢などによる物価高騰が続く中、家計はますます厳しくなります。猛暑の年の冬は寒さが厳しいと言われており、気になるところではありますが、その前に「収穫の秋、味覚の秋」を楽しみたいと思います。

三回目の今回は、生産者・産地交流を中心にお話していきます。

生産者・産地交流

生産者・産地交流なしに組合員活動を語ることは出来ないといっても過言ではありません。一一の地区委員会では、それぞれの地域の生産者さんや産地、団体等との交流や農業体験・農作業支援を通

して、こだわりを学び、食の安全・安心について考え、伝える活動に取り組んでいます。

私が活動を始めた頃は「生産者交流」を「ちよびボラ（ちよびっとボランティア）」と言っていました。「生産現場を見せていただき、お話を伺うためには作業の手を止めてしまう。その分、私たち



リンゴの枝払い



じゃがいもの収穫

が出来る作業をお手伝いします」との意味だと先輩委員さんに教えてもらいました。草取り、間引き、苗植え、収穫、洗浄等出荷前作業、果樹園での枝払いなど、私たちに出来る作業も増えてきました。継続した交流は互いの信頼関係をも築き、コロナ禍での人手不足時や災害の際の支援にもつながっています。

私の「ちよびボラ」デビューは、草取りでした。「今度は・・・さんの畑に行きます！」と言われ、「素人の私が大事な畑に入ってよいのだろうか」と不安に思いつつ、長靴と軍手をもって現地集合。作業の手順、注意事項等の説明を受け、作業開始。はじめは、「楽しいね！」なんておしゃべりしながらの作業が、徐々に無口になっていく。草取りの大変さを



かぼちゃの収穫



枝豆の収穫

知るとともに労働後の心地よい疲れと充実感も知る一日となりました。そして次の作業に向け、動きやすい作業靴や服、日焼け防止の帽子、手袋などを揃えだし、回を重ねることに格好だけはプロ化していくのでした。

ある生産者さんのところでは、田んぼの畔にグランドカバープランツ（芝生の

ように地面を覆って育つ植物。雑草対策や景觀調整の役割も持つ）を定植する作業のお手伝いをしました。思った以上に作業が進み、「終わった!」と思うとトラックに苗を積んでやってくるんです、何度も（笑）。次に訪問した時には、苗はがっしりと根付き、しっかりとグランドカバーの役目を果たしていました。作業しながらの生産者さんのお話は、沢山の学びと気付きがあります。これが生産者交流のいいところです。そして何より「楽しい!」

お米たんけん隊・田んぼの

生き物調査隊

私が在籍していた札幌東地区委員会と、札幌西地区委員会では、一年交代でJAさん・ホクレンさんと一緒に組合員さん親子（保護者と子ども）バス企画「お米探検隊」と「田んぼの生き物調査隊」を



田植え

企画・実施、コロナ禍で一時中止されましたが、現在も継続して行われています。お米たんけん隊は二〜三回シリーズで田植え・草取り・稲刈りを体験。おまけ企画として、JAさんがカントリーエレベーター見学、案山子作り、ジャガイモ植

えやいちご、サツマイモ収穫、パン作りなどを準備してくださり、毎回充実した内容になっています。

田植えや稲刈りは、泥だらけになりながらの手作業で行い、はじめは恐る恐る田んぼに入っていた子ども達も、慣れると泥汚れなど気にすることなく一生懸命作業に取り組む姿が見られました。子ども達以上に楽しんでいたのは保護者の皆さんかもしれません。また手作業だけでなく、田植え機、稲刈りへの乗車体験もさせていただき、子ども達は大喜び。お昼は生産者さんの奥様達が準備してくださった美味しいご飯を参加者全員でいただくのも楽しい時間です。

お米たんけん隊では、お米がどうやって作られ、食卓に届くのかを知り、農業の重要性、楽しさ、農業を身近に感じて欲しいと思っています。

畜産・酪農、養鶏を知る 交流

産地へ行き、説明を受けながら見学すると、「良質なお肉作り」、「病気にかけにくい環境」、「健康なからだ作り」、「ストレスフリー」、「安全な飼料」、「アニマルウェルフェア」、「生産性の向上」など、こだわりは何かによって飼育環境や方法に違いがありながらも大切に育てられていることがわかります。何をもって、食の安全・安心なのか、美味しい基準、価格の違いなど、私たち消費者が選択できる目を持つことが大事だと気付かされます。

あるフォーラムに参加した時、放牧酪農で家族ぐるみで牛の世話をし、乳牛としての役割を終えた時、「肉だけでなく皮などすべてのものを引き取る」と仰った言葉がとても印象的でした。

「命を育てる責任、命をいただく責任」

「いただきます」の挨拶には、命をいただくことへの感謝が込められていることを改めて考える機会になります。

新顔野菜

北海道では気象条件や作物の特性から、育てにくいとされてきた「にんにく」、「さつまいも」、「らっかせい」などの新顔野菜の栽培が拡大しています。そんな新顔野菜の栽培と収穫にも、各地区で関わらせていただくことがあります。自分自身が体験していなくとも、実際の話をお聞きし、試食させてもらうことができるのは全道で活動する委員がいるからです。有難いことです。

さまざまな学び

生産者さんとの交流では、作業の手伝いだけでなく、収穫物の保存方法や調理の仕方、美味しい食べ方を教えていただ

くこともあります。

例えば「ハスカップ」。あの有名なお菓子か、そのまま食べるか、ジャムにするくらいしか食べ方を知りませんでした。塩漬けにして、梅干しのように食べる。お米と一緒に炊くハスカップご飯。砂糖漬けなど。ちょっと教えてもらっただけで、レパートリーが広がります。私はドレッシングを作ってみました！

食べ方を知らないとお店で売っていても手に取ることはありませんから、知ることは大事です！

そして時には料理教室の開催も。生産者さんご家族と交流する機会が多く、料理教室には奥様に協力いただくことがあります。一番おいしい食べ方をご存知ですから！

食だけでなく、たい肥について学ぶこともあります。圃場横にあるさらさらとした土の山、ちょっと掘ってみると湯気

が出てきます。あったかい。におわない。牛ふんに、糞やおがくずなどを混ぜて発酵させた自家製の有機肥料とのことでした。

何でも学ぶ！楽しい！こうして学んだことを伝える活動も大事にしています。身近に素敵な生産者さんがいて、安心してこだわった美味しい食材があることを知っていただくためです。このほか

にも各地区では、幅広い交流をしています。

北海道の食料自給率は、二〇〇%を超えています。北海道ブランドが全国、世界に広まることも望ましいことですが、地産地消ももっと広がってほしいと思います。そのためには消費者が地元の収穫物を知ることが必要です。

吉田千恵さん

1966年宮城県生まれ。

札幌の短大(保育科)卒業後、幼稚園勤務。子どもの小学校入学を機に、コープさっぽろで組合員活動始める。

2021年から北海道食の安全・安心委員会副会長。

夫・双子の息子・実母・猫のジミーの5人と1匹家族です。



私たちの小さな活動がその一助を担えるよう、これからも継続して行っていきたいと思っています。